

IMAJ

ニュース
NO.76

発行年月日 1994年12月28日
発行所 (社)国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL. 03-3821-3737
FAX. 03-3821-6479
発行人 住友 義輝
頒 価 1部200円

- 世界家族の仲間入り
- 信頼できる人との出会い
- 新時代に必要な情報
- 心身の健康
- 問題解決の秘訣

総合テーマ
「信頼と平和の創造者へ」

CAUX 1994



CREATORS OF TRUST AND PEACE

会場：MRA世界会議場

マウンテンハウス（スイス・コー）

期間：一九九四年七月八日～

八月十八日

第48回MRAスイス・コー世界大会 特集号

世界八十ヶ国余から延べ
二千五百人が参加

第四十八回MRAコー世界大会は、七月八日から八月二十八日にかけてスイス、コーのMRA世界会議場で開催された。「信頼と平和の創造者へ」という総合テーマのもとで、全世代間ダイアローグ「過去、現在、未来の責任を分かち合うために」、産業人会議「失業問題の挑戦への対応」、コー円卓会議「収益性と企業の地球的責任は両立するか、それとも相反するか?」、ヨーロッパ会議「多様性の中の調和——様々なニーズを抱えるヨーロッパ」、女性主催会議「平和の創造者——ビジョンから行動へ」、紛争地域会議「危機に陥っている地域、危機を脱しつつある地域——互いの経験から学ぶ」が開かれた。

約八十ヶ国、二千五百人における参加者に混じって日本からは遠藤實ジュネーブ駐在大使夫妻、黒河内康ベルン駐在大使、関西日本スイス協会派遣の中学生六名など五十一名が参加した。

●「この会議では歴史の傷を癒すという欠かせないテーマを扱っています。それにはお互いに耳を傾け合い、学び合うことが前提条件です」と語るスイス外務省ヤコブ・ケレンバール外務次官



●スーダンのジョセフ・ラグー元副大統領（左）を初めとするアフリカ各国代表と懇談する黒河内康駐スイス大使

生後四ヶ月の幼児から八十六歳の老人までが参加した全世代間ダイアログでは、異なる世代が会議の運営や進行にあたった他、家では語られなかった戦時下での親の苦勞話、教室では語りづらいティーンエージャーの将来に対する不安などが、家族的な雰囲気の中で語られた。コーの特徴は？とたずねられたあるアフリカの女性は「アフリカの男が台所で働く世界で唯一の場所！」と答えた。

英国では「スイスの国際会議場で一夏ボランティア活動をしませんか？」という広告を全国の大学雑誌に掲載しアルバイトを募った結果、六百人が応募し、四十人の面接者の中から十二人が採用され、一ヶ月以上コーの運営にあたった。初めは皿洗いやなどの作業を中心に担当したが、後にはミーティングの進行等も行うようになり、中には滞在を延長して会議で積極的に発言する学生もあらわれた。

産業人会談

失業問題に焦点をあてた産業人会談の冒頭で発言したILOのピーター・ドューカー労働市場政策部長は「自由市場経済と民主主義、平等、社会正義とをいかに調和させるかが世界的大問題である」と述べるとともに、「労働は物品ではない。労働市場は製品市場ではない。雇用創出は人間の尊厳の問題である」と強調した。又オーストラリア港湾労働組合ジム・ベックス前委員長は、三年間の技術多様化訓練プログラムを通じてドッグの組合を二十七から二つに整理統合した経験を報告した。この間雇用は三分の二に減ったが、自主的退職以外の退職は一切無く、労働争議も皆無で、生産性は百分の増加をみた。この結果オーストラリア全体の輸出コストの削減、ひいては輸出増につながり、農業など他の産業従事者の雇用保護に大きく貢献した。「労働組合は、変革の抵抗者ではなく、推進者でなくてはならない」と、ジム・ベックス氏は締めくくった。

入会のご案内

(1) 正会員 個人 年額 6,000円

法人 年額 50,000円

(2) 賛助会員 個人 年額 3,000円以上

法人 年額 50,000円以上

郵便振替口座

東京八ー三八二八九

口座名 社団法人

国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA

国際会議やシンポジウムなどに参加

して外国の方々と交流していただく

機会の提供、②機関誌「MAJ」ニュー

ース、月刊ワールドレター等の送付、

③講演会、月例会等のご案内を行な

っています。

●世界家族の仲間入り

●信頼できる人との出会い

●新時代に必要なる情報

●心身の健康

●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のため

に特別協力年会費制度一口50、

000円（寄付扱い・年額）を設け

ました。ご協力頂ける方は資料を事

務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号

東京五ー四一三六五

口座名・社団法人国際MRA日本

協会特別協力年会費

「多様性の中の調和」ヨーロッパ会議

「多様性の中の調和——様々なニーズを抱えるヨーロッパ」というテーマで開かれたヨーロッパ会議には、白ロシア、クロアチア、セルビア、チェコ、ハンガリー、リトアニア、ポーランド、ルーマニア、ロシア、ウクライナなど東欧、及び中欧の参加者が多く見られた。この期間中、一九六八年のチェコの民主化運動「プラハの春」を弾圧するソ連軍のチェコ侵入下での女性の葛藤を描いたモゼロバ元

駐豪チェコスロバキア大使作の劇が上演された。この劇をロシア語に翻訳していたロシアのベラ・グリブコワ教授は、「当時若かった自分は、ソ連の戦車はチェコを解放していると本当に信じきっていた。こうしてロシアを憎む人々と直に接して、国の過ちに対する恥と、国に対する誇りとの間で、身が引きちぎれそうだ」と語った。旧ユーゴスラビアからは、モスLEM教の夫をもつユダヤ人の夫人が、敵対する人種や宗教の難民を差別せずにクロアチアの自分のアパー

トで面倒をみたという経験や、周囲の反対を押し切って、敵対するセルビア人地域と交流しているクロアチア人ジャーナリストの非暴力への決意などが語られた。スイス・コー財団前理事長のダニエル・モチュー氏は「残念ながら、スイスは新しいヨーロッパ作り(EU)に加わらない決断をしたが、コーは新しい世界作りに加わるつもりです」と語った。

女性主催会議

第二回女性主催会議「平和の創造者——ビジョンから行動へ」には、五十二ヶ国から五百人以上が参加した。インド在住のマザー・テレサは「今日平和が存在しないとすれば、それは私達がお互いに属し合っている、ということをお忘れてしまったからです」との言葉と共に「沈黙の実りは祈り、祈りの実りは愛、愛の実りは奉仕、奉仕の実りは平和」というメッセージを会議に寄せた。この会議の提唱者タ

ンザニアのアナ・アムゼクワ首相相は、「かつて平和を語る女性会議で、女性の前進を阻む者は誰か？男か、政治家か、イデオロギイか」と他の人を責めたものの、肝心の参加した女性の間で平和を築くことができなかった。結局この阻む者とは自分自身ではないか、と考えるに至った。コーには国連関係の会議には存在しない雰囲気が存在する」と述べた。開会式で基調講演を行った相馬雪香難民を助ける会会長は「女性は誰も平和を望んでいるが、どこから始めるかという第一歩を見い出せないことが多い。自分の過ちを謙虚に認めることから始める。よく、それは難しいからできないと言う人がいるが、そういう人に対して私は、それはできないのではなくないだけで、と応えます」と述べた。日本側招待委員の荒井佐念子東京フォーラム代表は、女性による情報・教育ネットワーク作りの成果を発表した。ソマリアでアイディド將軍と対立するアリ・マディ暫定大統領夫人、北アイ

ルランドでカソリックと結婚し



●「宗教と精神風土—国際政治の忘れられた要素」の出版披露を行なうアメリカ国際戦略問題研究所(CSIS)のダグラス・ジョンストン副所長



●放サハロフ博士の側近でもあったロシア人権委員会セルゲイ・コバレフ委員長(左)

たプロテスタントの女性、イスラエルでユダヤ人とパレスチナ人及び、ユダヤ人過激派とユダヤ人穏健派との間の和解を仲介する民間組織の創始者などが、コーでの体験を活かして、帰国後異なる立場の人々との和平に取り組んでいく決意を語った。

同会議は「平和の創造」という以下のような憲章を採択した。

「平和は、他の人、他の文化、宗教、国のことを考える時に実現する。自分の持つ何かを捨てずに平和を築くことはできない。平和は自分から始まる。」



●女性主催会議で発言するマレーシアMRA協会サレハ会長（マハティール首相義姉）

- 1、他人を比較するのではなく、評価する生き方をする。
- 2、自分の欠点を正直に見つめて、信頼する友の助けを得てそれを克服する。
- 3、来たるべき第七世代のために生きる。
- 4、瞑想の時間をもち、勇氣をもってそこから得られた考えに従う。
- 5、身の周りの人に起こることと特別な関心を払う。
- 6、自分達と異なる考えを持つ人々の理解に努め、同じ考えの人々には真実を伝える。



●コー円卓会議運営委員長の重責を終え、創始者のフレデリック・フィリップス博士（右、88才）から感謝の花束を受けるウォルター・ホードリー博士

紛争地域会議

第五回を迎えた紛争地域会議「危機に陥っている地域、危機を脱しつつある地域―互いの経験から学ぶ」には、全ての大陸十六ヶ国からの参加があった。この会議の初日にはアメリカの有力シンクタンク「国際戦略問題研究所」(CSIS)による「宗教と精神風土―国際政治の忘れられた要素」(仮訳名)の出版披露が行われた。これは世界の七つの紛争解決に役割を果たした宗教的、精神的要素のケース・スタディーを元外交官や政治学者がまとめたものである。MRAに関しては、第二次大戦後のドイツとフランスの和解、及びジンバブエの和平と独立に果たしたMRAの役割が、長年の研究に基づいて述べられている。そしてこの発表の後には直

接当時の解決に関わったフランスのイレヌ・ロー夫人の娘さんや、ジンバブエのシバレ氏などが壇上に上がり、当時の模様を振り返った。

カンボジアからは、大の五十

二名の参加があったが、シリウツド外相(シアヌーク国王実弟)は以下のように述べた。「ポル・ポト派への対応に軍事力だけであたるのは芳しくない。政府は同派の非合法化を決定したので、表口は閉ざされたが、裏口だけは開けておきたい。大虐殺を決して見過ごすわけではない。復讐の政策をとるべきではないからだ。国防も必要だが、今国民にとって病院、学校、道路などの建設のほうが急務だ。また国民は、すぐに米ドルをほしがるが、先祖はドル無しでアンコール・ワットを作ったことを忘れてはならない。和解の精神、気高さ、叡知の再興が急務だ。時間にかかることではあるが。」

コー円卓会議は来年三月コペンハーゲンで開かれる国連社会サミットに参加を決めた他、女性主催会議グループは来年九月に北京で開かれる国連女性会議に参加することが決まった。



お互い愛し合うために人は創られている

日本が八月十五日の敗戦を期に平和を迎えたこの時期に私はスイスで開催された女性国際会議に出席していた。レマン湖を見おろし、アルプスを眺める雄大なコートのマウンテンハウスで「平和の創造者―女性のイニシアティブ―ビジョンから行動へ」のテーマで女性会議が行われ、世界五十二カ国より五百人が集まった。女性会議は三年前に第一回が開かれ今回が二回目であった。企画の中心は前回と同様、

「平和の創造者―

ビジョンから行動へ」

女性主催会議に参加して

東京フォーラム代表

荒井 佐 念 子



女性会議の発案者であるタンザニアの首相府相のアナ・アブダラさんで自国ではアナ・ママと慕われている気さくな女性である。国連主催の一九七五年第一回メキシコ女性大会に出席し、平和は女性が議論するだけでは実現しない。女性が女性の尊厳を自覚し、自分のできることからイニシアティブを取り、実践しようとする世界大会を提案したのである。開会式はニュージーランドの

先住民族マオリ族の性的な精神の歌と踊りで始まり、地域の代表が自分の国のビジョンを披露した。次いでノーベル平和賞受賞者のマザーテレサからの次のメッセージが読み上げられた。「沈黙の実は祈り、祈りの実は愛、愛の実は奉仕、奉仕の実は兄弟姉妹であることを忘れるから平和がないのです。お互い愛し合うために人は創造されています」。

基調講演をされた相馬雪香様は「自分ができることからまず行動を起こすことが大切です」とご自分の家庭生活の体験を話された。十五年前に「カンボジア難民を助ける会」を設立した際、政府の賛同を得られなかったにもかかわらず日本国民一人が一人一円づつ出せば一億円になると自分がイニシアティブを取り、海外援助活動を始めた。常に沈黙の時間の中で心の声を聞きつつ堅い信念とともに行動してこられた相馬様の生き方に対して参加者は惜しめない拍手を送った。



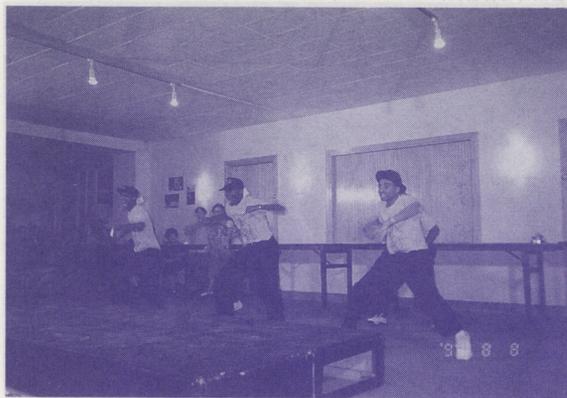
●ラオスの歌を歌うチャントラシー（元ラオス外務次官）夫妻他



●女性主催会議で開会宣言を行なうタンザニアのアナ・アブダラ・ムゼクワ首相

心を開いて話し合う人々

二日目、一人の英国の婦人がグループによる話し合いの後、私に「私の弟は第二次世界大戦中に日本人に殺されました」と話しかけてきた。「実は私も十五才で学徒動員で工場で働いていた時、アメリカ軍の空襲による焼夷弾で私の親友が私の目の前で即死しました」と話したところ彼女は自分と同じ苦しみを感じ、本人も経験していたのだと知り、その後は人に会うたびにその話をしていった。クロアチアとセル



●黒人少年非行グループが更正して犯罪や麻薬問題などに取り組んでいるアメリカ、アトランタ市のBTAグループによる熱演

ビアの女性、南アフリカの黒人教育家と白人女性、アラブの女性とイスラエルの女性が国、民族の対立を超え、心を開いて話し合う姿があちこちに見られた。「平和を作る人による次世代を作るにはどうすればよいか」というテーマでパネルディスカッションが行われたが私もパネリストとして話す機会が与えられた。私は母親としての立場から母親こそ家庭で将来平和を作る人を生み育てることができると切な役割と責任をもっているということを述べた。ウクライナの大学の英語の先生は語学教育を通して学生に教えていると語った。聴衆を最も感動させたのはアトランタからきたBTAという黒人ティーンエイジャーのグループの体験談であった。かつては自分達も非行に走っていたが、その世界から足を洗い、チェンジし、いまだに非行グループにいる高校生と話しあう努力を重ね、暴力、麻薬犯罪の阻止にあたっている。六年前に作られたこのグループの数は今では五千にのぼり、各州に広がっている。昨年はドイツ、今年は

ノルウェーに招待されBTA活動について話しをするということであった。高校生が自らの手で友達の高校生を立ち直らせ、社会をよくしようという自助努力には感心させられた。

紛争はアフリカだけにあるのではない

世界には今なお紛争は絶えない。強者の論理に対し、弱者の論理が正当化されない限り、また、宗教や民族の違いから生じる恨み憎しみが癒されない限り世界に八月十五日は来ないだろう。また力の支配から心の世界への転換がない限りルワンダの悲劇は続くであろう。「紛争はアフリカだけにあるのではない」と北アイルランドの女性はカトリックとプロテスタントとの間の殺し合いの悲しい現実を訴えた。自分はプロテスタント、夫はカトリックという夫婦であるが、夫がフットボールの試合についての口論が原因でプロテスタントのグループに襲われ負傷した。彼女はその後、自分のできる平和への実践行動として近所の子供達のグループ作りを始

め、そのグループ活動を地域から地域へと広げている。子供を通して大人の持つ偏見、憎しみを取り除く努力をして効果を上げていると報告した。「次の時代を背負う子供達が平和の大切さを知ることが、時間はかかるがこれが一番です」と力説した。

コーの特色であるボランティアで台所で働いていた時、リッチモンドの元市長とも話す機会があった。彼は定年後アフリカ系アメリカ人としてBTAの若者の相談役を務めているが、弱い立場にある黒人が自分達のルーツをアフリカに求めることによりアイデンティティを確立し、それにより自己実現をはかり、黒人としての尊厳は人間の尊厳であるということを自覚するようにと指導している。自己表現をはかることによつて他者との関係性を深め、平和への実践につながっていくように教育していると話してくれた。

自分を縛るものからの解放

今年の女性会議は三年前と比べてより精神性が強調された。夕食をとらず五時から八時まで

断食をして祈る一日もあった。暗いホールにロウソクの灯りがゆらぐ中で各国の代表が母国語で祈りを捧げた。宗教、宗派をこえて絶対者としての神に捧げる美しい祈りのひとときであった。平和の創造者としての女性をテーマとして取り上げたのは平和を単に戦争に対する平和という意味だけでなく、心の平和という視点からも取り上げるためである。心の平和を得るために私たちは自分を縛るものから解放されなければならない。恨みや憎しみ、嫉妬などを含むすべての欲望からの解放である。MRAが道徳再武装という言葉の表面的解釈にとらわれず、人間の存在とその在り方の深い意味を悟る運動として発展することを期待したい。ブックマン博士の意図も根元的にはそこにあったのではないだろうか。

新しい世紀の夜明けを感じた閉会式

閉会式は形式にとらわれず、参加者が自分の出来る実践の具体例を発表をした。今回の会議のテーマである「ビジョンから

行動へ」締めくくりである。私はアジア代表として私が六年前に東京フォーラムという女性の会を女性のイニシアティブで発足させ、現在、会員六百人の女性グループとして意識啓蒙運動として発展していると報告した。そしてMRAの精神を生かして行っている旨を発表した。同じようなグループが他の国にも誕生することを希望すると述べたところ、南アをはじめ何人かの国の女性リーダーがネットワークしたいと持ちかけてきた。フィナーレはアフリカの女性が奏でるダイナミックな太鼓のリズム、踊り、そして新しい南アフリカの独立を祝う歌の合唱で幕を閉じた。それをじっと見つめる白人参加者の顔は現実をそのまま受けとめる平和そのものであった。歌い終わると会場には割れんばかりの拍手が響きわたった。国家、民族、人種、宗教、性の壁を越え、女性がイニシアティブを発揮し、行動力をもって平和を築こうとしている。新しい世紀の夜明けが感じられた世界女性大会であった。(終)

MRAビデオのご案内

日本語吹替版

明日を愛するがゆえに

——イレーヌ・ロー夫人の生涯——

頒価 5,000円
(郵送料サービス)

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇氣ある
人々により始められ後のEC
設立の礎となった。

好評頒布中！



●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人として母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

お申し込みは
MRA事務局へ

03(3821)3737

MRAコー会議に参加して

総合研究開発機構

研究企画部主査 平井照水



今年のMRA世界大会は「信頼と平和の創造者へ」という総合テーマのもとに開催され、私は八月十五日〜二十五日にかけて行なわれた紛争地域会議の前半部分に参加させていただいた。

この紛争地域会議のテーマは、「危機に直面する地域、危機を脱しつつある地域——互いの経験に学ぶ」であり、実に六十六カ国から五百人もの人々が参加した。テーマに象徴されているとおり、旧ユーゴスラビア、ソマリアなどまさに危機的状況の真只中で苦悩している人々、カンボジアなど危機を脱し明るさ

成功と苦悩の様々な経験を胸襟をわって語り合い、信頼と平和に満ちた明日の世界の創造のため何ができるかを身近なところから考えていこうというものであった。MRAコー会議についてはご存じの方も多いかと思うが、今回初めて参加させていただいた者の一人として、以下、個人的感想を述べさせていただきたい。

コーでの生活とは

コー会議には、実に様々な人々が様々な表情で参加していた。ジャマイカの総督も、カンボジアの文部大臣も、外務大臣も、宗教大臣も、また、人生の先輩も、人生の岐路にたち悩む青年も、そして、キリスト教徒も、ユダヤ人も、仏教徒も、イス

ラム教徒も参加しており、そこでは、民族、宗教、年齢、国籍、性別といった、あらゆる違いを乗り越え、同じ土俵での生活と対話が繰り広げられた。これほど多様な人々と、じっくり話す機会がもてるということは、まず日常生活の中では想像もできないことである。しかもコーでは、会議場の運営も含めて皆が一緒に携わっていこうとの考え方の下に、大臣がお茶係だったり、お皿洗いの係だったりする。こうした風景が、毎日繰り広げられ、いつでも、どこでも、だれとでも気軽に挨拶を交わし合うという生活を通し、会議参加者の間に、同じ人間としての連帯感や親近感が築かれていったように思う。

こうした雰囲気は会議にも反映され、偏見や外見的相違に捉われず、実に率直で建設的な意見交換が行われた。中でも印象的だったのは、中東における宗教対立に関連し、宗教が誤って使われてきたことへの反省がなされるとともに、キリスト教徒自らが、「キリストはユダヤ人だったのであり、そもも同じ神



●コーヒーを給仕するカンボジアのウン・フット教育大臣(後の外務大臣)夫妻



●カンボジア代表。(左から) ロン・ピサロ元外務次官、ヒエン・バナリット宗教大臣、ソクンティア・ウンソー警察庁部長、ウン・フット教育大臣(後に外務大臣に就任)

のもとになぜ争わなければならぬのか」と述べたことである。それをもとに人類共通の基盤としての宗教の果たす役割を求めていくべきなのではないかとの意見が出され、具体的な提案へと議論が展開されていった。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教のいずれにとつても重要な聖地エルサレムを、皆の集う共通の首都としてはどうか。逆に宗教を切り離し、政治、経済の場としての現実的な「橋」を捜すべきではないか。今必要なのは

新たな認識であり、一つの象徴的な試みとして「オープン・ハウス」を行つてはどうかといった具合である。こうした提案はコー会議ならではの成果といえるのではないだろうか。

また、コーの会議場は、レマン湖を目下に臨み、美しいスイスの山々に囲まれた大変素敵な「お城」である。しかも、このお城は数十年前に、MRAの活動に賛同した多くの人々の善意により購入されたものであるとともに、会議の開催にあたっては、地元ボランティアの方々が掃除等の準備を行っている。実際、

「もう一年近く、毎年コーでベッド・メイキングのお手伝いをしているのよ」とはつらつと語るおばあさんにも何人かお会いした。こうしたボランティアの活動に支えられ、MRAの活動が続いていることを知った。一方、市民一人ひとりが自然体でボランティア活動を行っているスイスという国が、国際社会において示している存在感の由縁を垣間見たように思う。

コーで見た世界の情勢

コーは、会議をはじめとするいろいろな機会を通じて人々と交流し、世界の生の姿を直に知ることができ、「情報の十字路」でもある。そもそもソマリアの紛争は、人々が民主化を求め専制政治を倒すことに成功したものの、その後の受け皿が十分に発達しておらず無政府状態に陥ってしまったものであり、また、銃を持つことが民主主義だという誤った信念の広まりが、ソマリアの混乱に拍車をかけたということを、今回初めて知った。南北イエメンの対立の下、旧首都アデンが内戦の犠牲となり苦境

にあるが、国内問題あるとして国際的な援助も受けられずまさに危機的な状況にあること、カンボジアの情勢はマスコミが伝えるほど悪くはないことなど、世界各地で起きている事柄の一つ一つを肌で感じることができた。

こうした情報が得られるのも、MRAの活動自体が人の話を「聞くこと」を基本姿勢として重視しているからであろう。つまり、敵対する相手の声を「聞くこと」が出来た時、はじめて話し合いが始まり、お互いを尊重し合うことができるようになる。自分の内なる良心の声を「聞くこと」ができてはじめて、「自己を見つめ直すこと」ができ、「少し考えること」、そして自分のできることを「行動に移して行くこと」へとつながっていくのである。そのため、紛争地域の状況を知らると同時に、どのようにして危機を乗り越えるかを考える場が自然発生的に設けられたり、全体会議の場で「黙考する」時間が設けられたりした。また、紛争当事者自身が自分たちの問題について考え、交流を図ろうとする場も生まれてきているよ

うであった。

そうした中、あるソマリア人が私に質問を投げかけた。「昔、日本も明治維新という大きな革命があつたと聞くが、どのようにして大きな紛争を回避できたのか」、「日本も第二次世界大戦により、完膚なきまでに荒廃したと聞くが、どのようにして今日のように立ち直ることができたのか」。こうした質問を受けることによつて、自分そして日本を見つめ直す良い機会となつたばかりでなく、今日日本が国際社会で求められているのは何かを逆に教えられた思いである。紛争で打ちひしがれている国々に対し、日本の経験が某かの役に立つかもしれない。日本にも何かできるのである。そして、自分にも…。

私がついての「コー会議」

しかし、日本が何かをしてあげるといふ立場からのみ、紛争をとらえるのは間違いである。カンボジアの文部大臣がこう語つた。「今カンボジアの教育には、七十三もの緊急課題がある。さらに、その上に、腐敗を無くす



●キッチンで活躍する筆者



という大問題が控えている。しかし、それを成功させなければ、カンボジアの未来はない。私はなんとしてもやり遂げなければならぬ」。そこから感じるのは、「私利私欲を越えた強い使命感である。しかも、戦闘的ではない。その熱い思いを静かに力強く行動に移しているのである。大臣だけではない。カンボジアの人々が、カンボジアの再建を語る時の希望に満ちた表情と熱意、また、現在の和平への心からの感謝、そして明日への希望。今の日本では、こうした使命感や、熱意を語ることにな

となく照れがあり、一種の違和感さえ持たれてしまいうさである。その意味では、こうした理想を語り合えるカンボジアの人々が、逆にうらやましくさえあった。ソマリアやカンボジアの人々が、苦しみを乗り越え少しでも明るい未来を切り開いていこうとする真摯な姿に、すがすがしさを覚えるとともに、私自身、改めて生きる姿勢を学んだ思いである。

冷戦終結とMRAの役割

冷戦終結という大きな世界情勢の変化は、MRAの在り方に

も大きな変化をもたらしているように思う。これまで封じ込められてきた火種が世界各地で国内紛争として噴出し始めている。今、内政不干渉等の問題から、紛争の予防および解決にむけてNGOへの期待が高まっている。さらに、MRAにおいては、その活動自体が、自分の家族や会社といった身近な問題も、国内における社会的対立も、国際紛争も、問題の根は同じであると考えるの下に展開されてきた。その意味で、国内紛争への対応についても長年の蓄積があるといえるのではないだろうか。

であり、人間性そのものへの感受性を大事にした外交、対話の姿勢が今、改めて求められている」との新たな時代認識が述べられた。つまり、パワー・ポリテクスのもとに暴力を正当化してきたことへの反省とともに、紛争の予防および解決において、人々の傷ついた心を癒すこと、失われた信頼関係を取り戻すこととの重要性を再認識し、人間を中心にした視点を外交にも取り戻すことを、新たな世界平和構築に向けて提案しているのである。また、その中の一つとして取り上げられているMRAの活動も、冷戦終結という大きな世界情勢の変化のもと再評価されようとしている。そうした中、ここ二、三年単発的に行われてきた紛争地域会議を、今後はさらに継続的なものとして続けていくことが決まったと伺ったのは心強い。

今回のコー会議は、MRA自身がその新たな役割を再認識する上で重要であったとともに、私自身、MRAの新たな可能性を参加者の静かな情熱の中に見た数日間であった。

(終)

紛争地域会議に

参加して

東京大学法学部助教授

城山 英明



私は、一九九四年八月十四日から二十五日まで開催されたMRA紛争地域会議（「Regions in Crisis」）のうち、十七日から二十日まで参加することができた。また、七月にも経営者、労働者による産業人会議と財界人によるコー・ラウンドテーブルの一端に触れることができた。ここでは、主に紛争地域会議での議論を紹介するとともに、紛争解決におけるNGO（非政府主体）の役割という観点から若干の検討を行ってみたい。

食を話したい人と個別に約束をしてとることになる。過去の紛争解決事例におけるMRAの役割について関心を持っていた私は、この食事、お茶の時間に、ジンバブエの平和的独立、パプアニューギニアのブーゲンビル島における紛争解決の試み、フィジーにおける紛争解決の試みの様々な関係者から話を聞くことができた。また、夜にも会議や催しが多くの場合行われる。さらに、四日間のうち三日間は食事の準備をボランティアとして手伝うこととなる。このように、会議では、様々な人々との様々なかたちでの途切れることのない密なコミュニケーションを通して相互理解を深めていくこととなる。MRAの組織運営において最も興味深いのは様々な

なボランティアを其に運営されていることである。会議の開催されたマウンテンハウスには最大限六百人近い参加者が滞在していたと思われるが、給料をもらって働いている者はその内の十人程度だという。また、各国から現物の寄付として、リンゴや調味料等が送られてくる。ボランティアとしての最大の要素は、各会議参加者による食事の準備への参加である。この参加は、単に組織運営のコストを下げるというだけでなく、食事の準備という会議とは異なる種類の共同作業を通して参加者間のコミュニケーションを促進するという役割を持つ。いわば、食事という人間共通の最低限の「機能」における協力を通して参加者間の「信頼醸成」をはかっているわけである。

共通の「フォーミュラ」

紛争地域会議の目的は、世界各地の紛争解決における経験交換を促すことにあった。確かに、各地域の文化的コンテクストによって紛争解決の方法には



●ユダヤ教、イスラム教、キリスト教代表による公開シンポジウム

異なる側面もあるが、基本的には共通の「フォーミュラ（方式）」（グリフィス氏）があるという暗黙の前提で議論が進められた。また、この紛争解決の「フォーミュラ」は伝統的な「パワーポリティクス」とは異なることが、アメリカのCSIS（国際戦略問題研究所）の一員として参加した元アメリカ国務省外交官のモントビル氏らによって強調された。モントビル氏自身は、実力を主たる手段とする「パワーポリティクス」の限界をアフガンニスタン紛争や中東での実力手

段に対するテロ活動によって認識させられたという。そして、「パワーポリテイクス」にかわる「新しいパラダイム」とは、他者への敬意、他者の承認、受容に基づくコミュニケーション形成を指向する方式であるとされた。この会議において主たる検討素材とされた地域は、南アフリカ、カンボジア、旧ユーゴスラビア、キプロス、ソマリア、ジャマイカ、リトアニア等であった。

アフリカの心とやり方

最近初めての全人種による民主的選挙を経験したばかりの南アフリカについては、多くの機会に言及がなされた。南アフリカの経験において注目された第一の点は、選挙参加を拒否していたインカタ自由党のプレテジ議長を選挙参加に動かしたケニアの元大学教授オクム氏の役割である。オクム氏はキッシンジャーらの国際調停団が失敗した後も根気を持って説得活動にあたり、最終的に成功した。ここでは、現地における方法の理解、すなわち、「アフリカの心とやり

方」を理解する必要がある」ということが強調された。第二に、選挙後、現在行われている活動として、警察、軍の再訓練、教育の再建が注目された。警察についてはこれまで「反乱鎮圧」の手段であったものを非暴力的手段を重視するものへと変えなければならず、軍についてはこれまでの各勢力の軍を統合することが必要とされていた。この再訓練のための各種のワークショップが実際に行われていることが紹介された。南アフリカに関しては、もちろん様々な課題が指摘されたものの、新たな国旗を掲揚するという儀式に象徴されるように、将来へ向けての明るい雰囲気が見られた。

カンボジアからは現職の閣僚も

カンボジアからも数人の閣僚を含む多くの参加者があり、いくつかの機会にその経験の紹介が行われた。カンボジアについては、「許し」に基づく平和の段階のみならず、「国造り」のため様々な苦労が述べられた。例えば、相は、教育における

腐敗防止のための諸方策を紹介した。その内容には、受験者を特定できないような試験用紙の導入、教師の地域間移動の導入、過去の汚職の「許し」、今後の汚職への厳罰、教師の給与改善等が含まれていた。また、キプロスの税関担当官庁の次官からは、自らの汚職排除の経験に基づいて、カンボジアの税関職員を再教育するプログラムが紹介された。カンボジアやキプロスといった諸国では、国家の租税収入に占める関税収入の比率は大変大きいのであり、従って税関における汚職排除は財政運営上も重要な課題なのである。

予防外交の失敗

キプロスの内戦についても様々な観点からの検討が行われた。例えば、イギリスの元外交官は、一九五九年の条約でキプロス支援の義務を負っていたにも拘らず、一九七四年のトルコのキプロスへの侵攻に対して、軍人の死傷への危惧、資金負担への危惧、トルコがメンバーであったNATOの結束への願のため、



●ジャマイカのハワード・クック総督(右)とキプロスのディノス・ミカエリデス内務大臣

ジャマイカとソマリア

ジャマイカに関しては、その紛争解決の過程がジャマイカ総督らによって紹介された。ジャ

マイカでは、一九七〇年代にはジャマイカ労働党と人民国民党との党派対立が激化し、都市も荒廃していた。それに對し、一九八〇年代には、教会が主導して教会指導者による国民会議を設立し、この会議が重要な役割を果たした結果、一九八八年には両政党間の和解が成立した。また、社会経済的にも、一九八六年にはアメリカ国際援助庁の援助の下、政府・民間合同によるキングストン・プロジェクトが開始され、都市再開発やコミユニティー開発が促進された。ただ、他の参加者によると、家庭内の紛争が増加し、警察内に家庭内紛争解決担当部局が設置されるという問題も出てきているという。

また、会議の期間中、ソマリ各派の出身者による会合が続けられていた。彼らは主としてソマリア国外に居住する各派の人々であり、既にこれまでも、スウェーデンのウプサラで会合を持っていた。今後は、国内居住者をも徐々に巻き込み、ソマリア国内で会議を開催することを目指しているという。かつて

のカンアの国外居住者による会合がやがて新国家の閣僚の会合へと展開していったように、このソマリア人のイニシアティブも徐々に展開していくかもしれない。

新たなネットワーク構築の必要性

以上のようなことが議論された紛争地域会議は、経験の相互学習の機会であり、また、ソマリア各派の関係者の会合にみられるように実際の非公式的な関係構築の場でもあった。このような経験交換、非公式的關係構築の場としてMRAのようなNGOは政府レベルの活動に対して比較優位を持っているといえる。このような活動を行っているNGOは欧米を中心にいくつかあるが、それらの中のMRAの特色としては、個人レベルでの関係・変化を重視していることと、大変権的な組織であることがあげられるであろう。MRAでは特定のリーダーがアジェンダを決めていくわけではない。この分権性は、変化する環境に長期的に適應していくた

めには有利である。一方、いくつかの課題もあるように思われた。第一に、活動を言葉にして分析していく必要があるように思われる。経験は一部のみに密教的に把握されるだけでなく、広く共有される必要がある。そのような試みとして、今回の紛争地域会議に参加していたアメリカのCSISが行っていたような「外」からの活動の分析は今後とも地道に促進されていくべきであろう。第二に、MRAのようなネットワークが資産である組織にとつては、常に新たなネットワークを再生産することが不可欠である。私は、今回参加する中で、一九四〇年代からの第一世代の参加者のエネルギーに驚嘆するとともに感銘を受けた。しかし、今後とも彼らに頼るといふわけにはいかないはずである。新たな世代のネットワークを構築していく必要がある。一九八六年に貿易摩擦への対応として設立されたコー・ラウンドテーブルはそのような新たなネットワーク構築の良い例といえるかもしれない。(終)



●皿洗い、スポーツと大忙しの城山助教授 (人びと) 入会者会報の巻頭

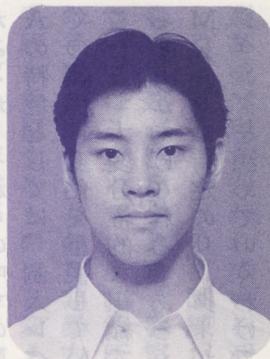


●紛争地域会議に出席し、紛争各派間の対話の道を模索するソマリア各派の代表

コーでの体験

=私の新しい人生のスタート=

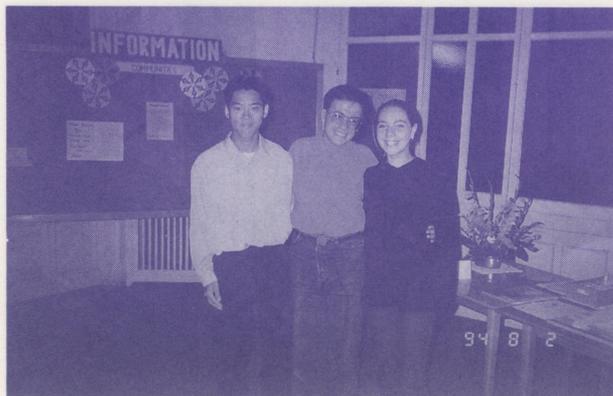
成城大学4年
太田敦之



私は今年の夏に祖母の相馬雪香とMRA世界大会に参加しました。MRAとは何なのか分からないまま、祖母と東京フォーラムの荒井先生と一緒に飛行機にのりました。長いフライトと一回の飛行機の乗り継ぎの後、ジュネーブに着きました。ジュネーブの空港ではMRA職員の彌勒菩薩のような顔をした藤田さんが車で迎えてくれました。気が付くとMRA世界大会の会議場である「マウンテンハウス」の前にいました。日は既にどっぷり落ちてあたりは真っ暗になっていました。車から降りると、いきなり人の歌声が聞こえてきました。歓迎の歌です。黒人が音頭をとって白人がサポートす

るといふ、私の想像を絶する光景がそこにありました。私がまず思ったのは、「あー、ここはこういう所なのか楽しそうだから一緒にやっちゃえ」ということでした。その後は、彼らと一緒に後から来た人達を歌と踊りで歓迎しました。いろいろなことが一度にあつたのでびっくりしました。自分は異質な文化でも楽しくやれるな」と感じて部屋にいきました。勿論、英語ができるなら、という条件付きですが、MRA世界大会の開かれるスイスのコーという村にあるマウンテンハウスには、何か人を素直にする魔術が隠されています。私はその魔術に初日からかかってしまいました。今になって考えると、旅先での心の解

放感と共同生活から生み出されるチームワークがこの魔術の正体だったのでないかと考えています。第一に、自分の心を常に解放する、そして自由にすること。そして第二に、相手のことを常に意識する、つまり相手と共に生きるといふこと。この二つのことを日頃意識して生活することこそ、現在の私達が生きる世界が抱えている多くの諸問題に対する、精神的な答えだと思えます。しかし、コーではそんなことに気が付かず、日々これ英語との格闘でした。なにしろ、英語の勉強に興味を失ってはや五年です。喋れるわけありません。話が分からない。言いたいことが伝えられない。本当のことを言うと最初は日本に帰りたくなるような事が多くありました。しかし、このような悪環境の中で、私は次第にいろいろな経験を積み、多くの事を学びました。私はコーでの共同生活で、サービングのチームに加わりました。そこで多くの経験をしましたが、その中で印象的な出来事が二つありました。



●友達になったポーランドからの参加者と



●祖母の相馬雪香さん(右から3人目)の友人たちと食卓を開んで

私の心を変えたたった一言の「すみません」

私はある日のサービングの準備の時、オランダから来た白人のおじさんにパンを切つて大きな銀色のお盆に並べるように言われました。終わつてからお盆を持つて彼の所に行くと、お前はまるで分かつていない、俺によこせ、と言わんばかりに彼はいきなりお盆を私から取り上げどこかへ行つてしまいました。ありがとも言わなかったのです。私はこの態度に腹が立ちました。非常に機嫌が悪くなりました。サービングの準備をしている間ずっと心が乱れていました。しかも、その十分後に彼がパンを切つているおじさんに、私のことをこう言っているのが聞こえてきました。「彼は私の言っていることが分からなくて困るよ」。その時だけは明瞭に英語が理解できたのです。ますます頭にきた私はものに八つ当りはするし、人にありがともすみませんも言いませんでした。そのような私の態度を見てか、その後には彼が私の背中を軽く叩いてさらりと言いました。「敦之、

「すみません」

さつきは悪かった。これからも友達でいてくれ」。私は涙が出そうになりました。この時、私の心の乱れはなくなりました。たったひと言の「すみません」がこんなにも人の心を変えるのです。また「友達でいてくれ」という言葉にも救われました。私は今まで人に対して友達でいてくれと考えた事がありませんでした。去る者追わず、来る者拒まずでやつてきました。非常に自分勝手だったのです。心の中で悪口を言う前に謝つて自分の非を認める事の大事さ。そして、人と常に友達でいようとすると、持ちの大らかさ。私に欠けていたものを学びました。

自分の心が開放されて初めて他人の心が分かる

次は若いレバノン人の男性の話です。彼はサービングのキャプテンでした。彼はコーには何度か来た事があったので物の置場所やサービングの手順に明るい人でした。彼は私の一週間後

に、自分の知っている事を彼に指示されたのでした。元来、人に指示される事が嫌いな私ですから、彼の指示から彼の声、そして彼そのものまで嫌いになってしまいました。彼も私の事を心良く思

つていないようでした。私が英語ができないものだから、彼が指示した内容が言葉では伝わらないのです。私は自分で仕事は分かっているつもりだし、彼にしたら私は分かつていないように見えるし、行き違いが多くありました。当然プラスチックシヨンがたまります。八つ当りが増え、不機嫌になりました。結果として人との対話や、特に簡単な挨拶ができなくなりました。そんな中で私は働きながら自分の心と対話しました。その時に考えついたのが、挨拶をする事だったので。それからというものの、人のちよつとした心使いを見ては感謝しありがとうと言ひ、自分に非がある時はすみませんと言ひました。すると、自分の心にあつた不満やわだかまりがなくなつていきました。挨拶に忙しいものでそんな事を

気にしている時間ありません。そして、私の心の中で彼に指示を受ける時にも不満がつのる事が少しづつ減つていきました。それと同時に、彼の事を心配するようになりました。彼はキャプテンとして、あらゆる所を駆け回つていました。彼の仕事は人の何倍もありました。私はやつと彼の苦勞を分かつたのです。そして彼がなぜ私にまくしたてるように指示を出していたのか知りました。自分の心が解放された時、初めて人の心が分かるのです。

私の心に戻つてきた大切なもの

私がコーで得てきたものは非常に大きいものです。それは情報以上のものです。それは何かと言えば自分らしさです。この二つの例の他にも色々な体験をしました。その全てが昔、母や祖母に教えてもらった事を思い出させる事ばかりなのです。「ありがとう、すみません、どうぞ」を必ず言ひなさい。誰が正しいのではなく、何が正しいかで判断しなさい。人の気持ちに



●スイス独立記念日（8月1日）を祝う式典

なつて考えなさい。人を好きにならなさい。人の悪い所を見るのではなく、人の良い所を見なさい。あなたが人を嫌えば、その人もあなたを嫌います。人を非難して人指し指で人を指すと三本の指があなたを指していますよ。誰が見てなくても、神様が必要で見ているのです。失敗しても良い。ただ二度同じ失敗はしてはいけません。分かつたつもりになつてはいけません。などの言葉を私はコーで再発見しました。

にあつてから、人が信じられなくなつていました。また、いじめられた事で自分にも自信がなくなつていました。その事が母や祖母が教えてくれた事を忘れさせていきました。コーでその多くを見つける事ができたのでした。ここ十年間位ポツカリと穴の開いていた私の心に大切なものが戻ってきたのです。それが自分らしさなのです。

スイスから日本までの飛行機の中で、私は自分の中にやる気がみなぎつているのを感じました。早く日本に帰つてやらなければいけない事をやりたいと強く思いました。十一時間のフライトという長い産道を抜けた八月二十四日の日本で、私の新しい人生がスタートしたのでした。

最後に、コーで大変にお世話になつたMRA事務局の藤田さんのご家族と杉さん、そして世界の多くのMRA関係者の皆さんに感謝いたします。そして、誰よりもこの旅行に行く機会を与えてくれた両親と祖父母に感謝します。ありがとうございます。

(終)

MRA国際青年会議レポート



●各国の青年の援軍も得て「幸せなら手をたたこう」を日本語、英語で歌う中学生たち

充実した日々

新生野中学三年

南卓也



かしくない気持ちでした。緊張しながら登山電車を降り、最初に聞いた言葉は、日本語。その後も、全員初対面なのに、「ハロー」とまるで親しい友達のように、声をかけてくれたのです。僕はあぜんとしていましたが、次の一瞬、頭から不安が消えてしまいました。

「MRA国際青年会議」とても難しそうなこの響きが、僕を不安にさせていました。教科書を使うことしか知らない僕には不安が体からにじみ出ていってもお

MRAでの生活はとても楽しく、言葉の苦勞もありましたが、世界各国の人と話をしたりして、充実したものでした。ここに来ている人々は、分け隔てなく声をかけてくれます。中には紛争

のR世の遣M、大派、しし会名加流協6参交又生にとイ学議ち又中会た本の年者る日区青若す・地際の躍西国中活関関A界に

中で大変な、クロアチアから来ている女の子たちもいました。本当にたくさんの方の人が集まっており、全ての人が平和を愛し、望んでいる、優しい人ばかりでした。また、ミーティングでは、大勢の人が自分の意見を言い、他の人の話を聞き、ジヨークを混じえながら考える。

しかも、それぞれが自分の意見を持っていて、人のためにはどうすればよいか、問題を解決するにはどうすればよいかを考えているのは、日本ではなかなか見ることの出来ない光景だ、と思いました。

スポーツは、世界共通なんだな、と今回思いました。話はつまったり、間違えたりしていましたが、辞書とジェスチャーを使ったこともあるけど、なにより真剣に理解しようとしてくれたから、英語も通じ、スポーツや話で友達がたくさんできました。言葉よりも気持ちの方が大事という人もいます。たしかに気持ちも大切だとは思いますが、言葉がなければ伝わらないと思います。ジェスチャーにも限界がありますから、言葉の必要性

というのを強く感じました。でも、初めて英語を学校以外で話し、分かってもらえたことが一番嬉しかったです。

食事一つをとっても日本と違うところだらけで、とまどいました。日本は早く、静かに食べるけど、ヨーロッパ等ではゆっくりと時間をかけて話をしながら食べているからです。慣れなくて困っている私たちに、みなさんは席をすすめてくださったりしたため、食事の時間さえ楽しく話ができるようになりました。しなければならぬ仕事も決めていただったり、仕事をしていた、ペースに追いつけなくなる、食事の終わった人が手伝ってくれたりしていたので、皿洗いで少し指先にやけどをしただけでした。その時は、口では言えないほど感謝しました。三日間、MRAに参加して、自分の中で何かが変わった気がします。世界中の地域の人について学んだことは数えきれないくらいです。ミーティングは身近な話題が多くて、「嫌いなこと」や「嫌いな人」などの質問に真剣に取り組む風景は、日本では

滅多にみられるものはありませんし、スモールミーティングで一人一人が意見を出し合い、人種が違っても差別なんてまったくありませんでした。

今回、僕は日本と比べすぎていたのかもしれない。だからこそ、日本の良い点、悪い点を日本の外から見て、少しだけ分かりました。悪いところをどうしてゆけば改善できるのか考えなければいけないと思います。さらに、行動しなければ何も得られない、ということ。勉強をしなければ言葉は話せない

● “高い生産性”を誇った大阪中学生チームの皿洗い



し、積極的にならなければ友達もできない。MRAは僕に大切なことを教えてくれました。なかなか日本で学べないことを経験したことは、大きなことです。僕は日本人的な、面倒くさがる性格を直し、英語などを勉強して、話せるようになったら、もう一度必ずマウンテンハウスへ近いうちに行きたいと思っています。

スマイルとハロー

北稜中学三年

中端友恵



私は七月二十八日から三十一日までの三日間をマウンテンハウスで過ごしました。私にとつてその三日間は驚きと発見、そして喜びの連続でした。その全部をあげていくときりがありません。マウンテンハウスでやった事一つ一つに興味があったように思います。私が一番好きだった

時間は、食事の時間です。もちろん、でてくる料理はすごくおいしかったけど、それ以上に楽しみだったのは、同じテーブルに座った人とする会話でした。毎回、違う人と座れて、その度に「ハロー、マイネームイズトモエ」と言って会話が始まりました。私の未熟な英語をみなさん食事を止めてまで聞いてくださり、本当に嬉しかったです。日本では二年半も英語を習っていないながら、数えるくらいしか外国の方とはしゃべったことがなくて、初めの方は本当に通じているのかなあと不安でしたが、みなさん笑ってまた話しかけてくれたので、積極的にしゃべっていけるようになりました。この時に、「笑う」ということの大切さがわかりました。

マウンテンハウスの中には、みんな友達のように「ハロー」と言って笑いかけてくれます。私も初めは言われてから言っていました。慣れてくると自分からも言えるようになりました。お互い一言しか言わないけど、相手の目を見て言うと、言われた方も嬉しいし、言い返された



●グループディスカッションで受験、親子関係、いじめなど身近な問題を率直に話す中学生たち

した。そんな大きな問題を真剣に話し合っているみなさんを見ていて、自分の視野のせまさが身にしみてわかりました。

これからは、どんどん視野を広げ、コーに集まるみなさんと十分話し合いができるぐらいの語学力をつけ、もう一度、コーのマウンテンハウスに行きたいです。

「世界」の中で

横堤中学三年

金子久美子



て信じられなかった。真下に見下ろせる湖と遠くに映える山々とを見ていると、小さなことなど忘れてしまえるような気がした。

初めて参加したミーティングは難しい内容だったけれど、それと同時にとても重要なことであることに気づいた。みんなが真剣にそういうことを考えているとわかったとき今まで、自分のことではしか悩めなかった自分の小ささを恥ずかしく思った。

また、世界から集まってくる人々のことを考えて設置されている同時通訳の数の多さには驚くばかりだった。もちろんその規模の大きさにも驚いたのだけれど、何よりも、世界中の人々、全員を思っていているであろうことに、とても胸を打たれた。でも、みなさん英語がとてもお上手で、私ももっと勉強して、英語のときくらはイヤホンを外して聴いてみたいと思った。

次の日から参加したグループ別のミーティングでも同じことがいえた。私達は通訳なしに聴けなくて、理解するのにみなさんよりワウンテンポ遅くもどかしい思いをした。英語がどれだけ

方も嬉しくなります。だから、私は廊下を歩くのが好きでした。日本では自分の身近な人だけはいさつをして、それもただ軽く礼するだけで、ちよつとさびしいような気がします。日本にも「ハロー」というような言葉があればいいと思います。

三日間という短い期間でしたが、私はたくさん事を学ぶことができました。「笑う」ということの大切さ、「ハロー」という一言の大切さとともに、会議を通して、同じ地球上でいろんな問題が起きている事も知りま

た。そんな大きな問題を真剣に話し合っているみなさんを見ていて、自分の視野のせまさが身にしみてわかりました。

これからは、どんどん視野を広げ、コーに集まるみなさんと十分話し合いができるぐらいの語学力をつけ、もう一度、コーのマウンテンハウスに行きたいです。

「世界」の中で
横堤中学三年
金子久美子

た。そんな大きな問題を真剣に話し合っているみなさんを見ていて、自分の視野のせまさが身にしみてわかりました。

これからは、どんどん視野を広げ、コーに集まるみなさんと十分話し合いができるぐらいの語学力をつけ、もう一度、コーのマウンテンハウスに行きたいです。

また、世界から集まってくる人々のことを考えて設置されている同時通訳の数の多さには驚くばかりだった。もちろんその規模の大きさにも驚いたのだけれど、何よりも、世界中の人々、全員を思っていているであろうことに、とても胸を打たれた。でも、みなさん英語がとてもお上手で、私ももっと勉強して、英語のときくらはイヤホンを外して聴いてみたいと思った。

次の日から参加したグループ別のミーティングでも同じことがいえた。私達は通訳なしに聴けなくて、理解するのにみなさんよりワウンテンポ遅くもどかしい思いをした。英語がどれだけ



●本年度ノーベル平和賞候補にもなったカンボジアのマハ・ゴサナンダ大僧正（左）とカンボジアに人道援助を続ける韓国仏教の朴清秀尼



●ダイニングルームに設けられた特設ステージ上で交歓する“世界家族”

また、クッキングやティータ
 イムでもたくさんの人と仲良
 くなりました。でも、やっぱり一番うれし
 かったことは、自分の英語が通じ
 たことです。ルームメイトや食
 事やティータタイムで知り合った
 人たちといろんなことについて
 話をしました。そんな時、単語
 をならべるだけの英語で、半分
 以上は身ぶり手ぶりでしたが、
 自分でもふと気がついてみると、
 一生懸命に通じるようにと話し
 ていました。言葉は不自由でも、
 相手の人もそれに答えてくれま

した。遠い外国の遠い人々と思
 っていた気持ちはなくなり、身
 近に思えてきました。国と国と
 の間には、国境があり、言葉、
 文化、習慣の違いがあります。
 けれどもこのコーで私は、たと
 え国境を隔てた異なる国の間で
 も、違いばかりではないとい
 うことを学びました。また、私は、
 初めて、日本語の通じない生活
 を経験しました。たとえ言葉が
 違っても、と思います。が、やっ
 ぱり、外国語を学習する大切さ
 を改めて実感しました。
 たった三日間でしたが、日本

僕はとても短い間でしたが、
 コーでのMRA世界大会に参加
 することができました。初めて
 見たマウンテンハウスは「うわ
 あ」とただただ驚くばかりのす
 ばらしい建物でした。広い会議
 場、設備の整った通訳のシステ
 ム、何もかも「すごい」の一言
 でした。



ではできない経験をし、そして、
 私の視野も、大きく広がりました。
 自分の国、「日本」のことは
 かりを考えるのではなく、世界
 は広いんだということを感じま
 した。私が、学んだことは、大
 きな価値があると思います。そ
 して、こんなよい経験をしたコ
 ーに必ずもう一度来ます。
 本当にありがとうございます。
自分自身の国際化
 東住吉中学三年
 谷川朋幸

僕は英語に自信がありません。
 片言の英語と呼ぶのにふさわし
 いものです。心の中を不安でい
 っぱいにしてこのMRAに臨み
 ました。しかし、ここでの体験
 は全てが楽しく、新鮮で驚くべ
 きことばかりでした。そして僕
 はここMRAで二つの大きな事
 を学びました。
 一つはコミュニケーションの
 大切さです。ここは世界中から
 たくさんの人々が集う場所です。
 だからドイツからきた男の子、
 クロアチアやルーマニア出身の
 女の子、教え上げればきりがな
 いくらいたくさん友達ができ
 ました。会う人、会う人が気軽
 に声をかけてくれ、一緒に食事
 をしたり、サッカーをしたりみ
 んながまるで親戚同士の様な暖
 かさがありました。片言の英語
 しか話せない僕がこんなに良い
 友達を持つことができたのも、
 ここにいらつしやるみなさんが
 コミュニケーションのうまくと
 れる人ばかりだからでしょう。
 自分も改めて、だれとでも友達
 になれる、だれにでも自分の意
 見が言える、そういう人間にな
 りたいと思いました。

もう一つは、もつと世界中へ目を向けなければならぬということ。分科会での話し合いで、他の国々にも日本での在日朝鮮人の方達の様な問題があるということを知りました。また、黒人と白人というような人種差別的な問題もまだまだ解決されていないのです。日本にいる間は日本の事だけというのでなく世界中で困っている人がたくさんいる、もつと広い範囲に視野を広げなければならぬということ。MRAは教えてくれました。

MRAに参加して、最初ここ訪れるまで英語がダメだと不安がっていた自分が遠い昔の自分に思えてきます。なぜならMRAは僕に相手の話を聞くことの大切さ、お互いの目を見て話すことの重要さ、そしてそうすれば必ず理解できるということをお教えてくれたからです。この発見は将来いろいろな面で僕自身に大いにプラスになると確信しています。

本当に三日間という短い間でしたが、たくさんの方々に囲まれとても有意義な時間を過ごす

ことがありました。大きな機械で洗ったたくさんの食器、みんなで歌った「幸せなら手を叩こう」。どれもこれも忘れ難い、いえ、忘れられない思い出です。この思い出一つ一つが僕の心の中でいつまでも生き続けることと思います。何事もまず自分自身を見つめ直し、自分で自分の国際化をすることが大切だと思います。またいつか、絶対に参加したいと思っています。MRAのみなさん本当にありがとうございました。

人々の心に国境はなかつた

十三中学三年

宮島良子



MRAでは、いろいろな会議に出席させていただきました。会議のテーマは、家庭についてや国境、自分自身についてなど、様々でした。会議には、お年寄りから私達より小さい子まであ

らゆる人種、国籍、年齢の人々が参加していました。そして私が会議の中で一番うれしかった事は、約二百人もの人々の前で自分の意見を発言できた事でした。すごくあたり前の事しか言えませんでした。MRAの会議では自分の思っている事をおたくならず素直に言えば良いというスタイルをとっているのので、私の小さな意見でもきちんと一意見としてとり入れて下さいました。



●スイス国営ラジオで放送されたコーの教会におけるカメルーンのおメンゲ師による礼拝

に切ったり、ねぎを切ったりしました。最後は時間がなく、ぼたぼたとしてしまいました。私も気持ちがあせっていたせいもあり、足を滑べらせねぎが入っていたボールを落としてしまいました。そして、すごくショックを受けました。なぜなら、ただでさえ足りないねぎを落としてしまい、みんなに迷惑をかけてしまったという気持ちでいっぱいだったからです。しかし、その時、魚を料理をしていたおばさんが、

「気にしなくてもいいよ。今日のティータイムのケーキを2枚も落とした人がいるのよ。さあ、終わったから先に食事をしていらいっしょい」。

と、言っただけで名前も知らない私をなぐさめて下さいました。この時、あらためて、人のあたたかさを知りました。

また、MRAには、合唱部があり、これは、誰もが参加でき、いろいろな国の歌を歌う事ができます。そこでもまた、たくさんの友達が出来ました。そして、練習した歌を会議の始めにみんな発表しました。曲名「幸せ

なら手を叩こう」でした。この歌を日本語と英語で歌いました。曲の中の手を叩くところや、足をならす所などで沢山の人が一緒に参加して下さいました。私もすごくうれしく、私まで幸せになりました。それにみんなが国境という壁を超えて、一つの世界という輪でつながっているように感じました。

「MRAで楽しかった時は、まだまだありませんでした。その一つは、食事の時間です。食事は、大変おいしく、その時その時で食事のテーマがあり、私達がクッキングをした時は「日本食」でした。何気なく食べている食事もきちんとした意味があるんだなあと、驚きました。そして食事の時間は、食事をする為だけでなく、いろんな人と知り合いになれる絶好のチャンスなのです。毎回、違う席、違うメンバーで食べ、多くの人と友達になりました。それに私も周りのみんなも食事を心から楽しんで食べていました。食事を楽しむという事はあたり前の事だけど、今の日本の家庭ではだんだんそれがなくなりつつあります。そういう面から考えても、すごく有意義な食事ができたと思います。また、自由時間になると、夜九時だというのに、明るいのでバレーボールに誘ってもらい、一緒にしました。みんな私達より年上の人ばかりなのに私達もめいっばい楽しめました。たとえ私が失敗しても、「大丈夫、次がんばろう。」と、声をかけてくれたり、もし、一点入れた時は、手を叩き合って喜んでくれたり、ずっと昔からの仲の良い友達のように楽しみました。

MRAでは、私みたいな英語が上手に話せない人でも、積極的に自分から一生懸命思いを伝えようと、相手の話も必死で理解しようとすればお互いが心からの友達になれると思います。たとえ、国同士が仲が悪かったとしても、ここにいる人達はみんなが、人を許すことができ、まっすぐに思っている事を話せ、どんな小さな問題でも話し合いで、お互いの意見を尊重し合っています。達は、グループ会議

の中で「いじめ」という事について話し合いました。いじめはどこの国でも起こっている事でした。しかし、それを解決するには、見ている側の第三者が協力していじめをなくすという事が大事だと思いました。一人や二人の力でどうする事もできない事でもそれが十人、二十人になるときつと大きな力になるという事を知りました。このようにみんなはどうすれば良くなるかについて考える事が必要だという事を今回、会議を通じて教えていただきました。

そして、コー世界大会に参加でき、日頃日本では学べない、人間として大切な事をたくさん学ぶ事ができました。人のあたたかさや人を許す事、本当の心からの友達、世界が抱えている問題についてなどを、目で見る、耳で聴き、手で触れる事ができ、今も昔も多くの人が平和になる為に悩み苦しんでいる事を知りました。そしてMRAは世界を理解する上で大変すばらしい所でした。そこに関わる全ての人々の心に国境はありません。そして、ここで友達になつたみんなと手紙を通じてつと親しくなりたいと思っています。最後に、私達を支えて下さった方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。そして、世界から争いがなくなり、永遠に世界が平和でありますように。



●日本の焼き鳥は大好評。腕をふるうのは東京の高校生の飯泉典子さん（左）と湯浅郁子さん

CRT

1994年コ一円卓会議より



コ一円卓会議(CRT)

貿易摩擦の激化と海外での日本のイメージの悪化を懸念したフレデリック・フィリップス氏(オランダ)とオリビエ・ジスカールデスタン氏(フランス)が提唱し、86年8月の第1回会議以来、夏はスイス、コ一で中間会議は世界各地で開催されています。

「企業の行動指針」

―その背景と意義―

東海大学法学部教授

高瀬 保



一九九四年七月M Aのマウテン・ハウスがあるスイスのコ一で、コ一円卓会議(CRT)が年次総会を開催し、「ビジネスのための原則」と称する企業の行動指針を世界に発表した。コ一円卓会議は、一九八十年代に激化した日・米・欧間の貿易摩擦と将来の貿易戦争の危機に直面して、日・米・欧三地域のビジネス・リーダーが相互の信頼関係(Links of trust)を築くために作ったものである。最初のCRTの会議は、オランダのフィリップス社元会長のフレデリック・フィリップス氏とフランスの欧州経営大学院INSEAD副理事長のオリビエ・ジスカールデスタン氏によって一九八六年に招集された。

その後CRTの議題が拡大され、雇用、社会問題、東西関係、企業倫理などを含むようになった。特に、キャノン会長の賀来龍三郎氏の要請で、世界の平和と安定を脅かす社会的・経済的脅威を減少させるために、企業責任の重要性についてCRTが活動の焦点を置いてきた。

CRT作成の企業行動指針

は、上記三地域のビジネス・リーダーで構成されたCRTのメンバーが、その企業行動に関する考え方を明らかにして調和させ、自らのビジネス上の決定の指針にするために作成したものである。また、それが他の企業が行動と政策の指針を考慮する場合の材料となれば幸せである。この行動指針の作成に当たっては、三地域のビジネス・リーダーが、各地域の文化・伝統を尊重しつつ、それぞれの良い点を国際化し取り入れた。CRTの全メンバーは、これを世界的に適用すべき倫理的原則として受け入れた。

経済上の国際摩擦は、文化・伝統の相違が原因であることが多い。摩擦の回避にこのような行動指針が役立つことを期待したい。また、それが世界の企業によって次第に広く適用されれば、世界経済の調和的発展を助けるであろう。

「企業の行動指針」の構成は次の通りである。序文、第一章 前文、第二章 一般原則、第三章 利害関係者に関する原則。

この指針の理解を助けるため

に、これまでのCRT会議での討議などを参考にして、若干の予備的解説を試みたい。この解説は、そのすべてがCRTメンバー全員の共通の認識であるとは限らないことをご了承願いたい。また、この指針は、適用上の経験をふまえて数年後に改良することが予定されており、広いご批判とご提案を仰ぎたい。

「序文」について

世界のビジネス社会が経済・社会状況を改善する役割を果たすべきである—というCRTの信条が、序文の冒頭で明らかにされている。今や、経済制度としては市場経済が東西冷戦の終結と共に世界的に受け入れられている。また、貿易・経済の自由化と規制緩和が世界の大勢となっている。

しかし、民主主義がそうであるように、市場経済も実施上多くの問題をかかえており、それを解決する絶えざる努力がなければうまく機能しない。例えば、「市場経済」を「持続可能な発展」や「社会秩序」と両立させる必要性が認識されている。

企業は次第に多く与えられている自由の中で、より良い社会を築く責任と能力を増してきている。この基本認識があつて企業の行動指針が作成されたのであつた。

「序文」はまた次の様に述べている。

「企業行動は、国家間の関係や人類の繁栄、福利に影響を及ぼす。企業…のあり方が、社会的、経済的变化をもたらすことから、世界中の人々が感じる恐れや信頼にも重大な影響を及ぼす。CRTのメンバーは、『まず自らを正すことを第一とし、誰が正しいかではなく何が正しいか』を明らかにしようとしている。」

他を責める前にまず自らを正し、罪を憎みて人を憎まずという指針の基本姿勢は、国際交渉における基本姿勢として貴重であり、日本の伝統にもそつている。

この指針は、日本側から出された「共生」および広く受け入れられつつある「人間の尊厳」という二つの理念を根拠としている。この企業指針は日本の集団主義のみに欧米の個人主義

第九回コー円卓会議参加者リスト

一九九四年七月二十四日～二十七日

■ヨーロッパ

ネビル・クーパー夫妻 (イギリス)

トップマネジメント・パートナーシップ会長 (元SITC副社長)

ジョン・コックス

科学産業協会専務理事 (イギリス)

フレデリック・ワイリップス

ワイリップス社元会長 (オランダ)

バツラフ・ジュネク

ケマボル社会社長兼社長 (チェコ)

フレデリック・パウアー

MST社社長 シーメンス元取締役 (ドイツ)

ラインハルド・フィッシャー夫妻

ブランコ社社長 (ドイツ)

フレデリック・シヨック夫妻

シヨック社社長 (ドイツ)

クルス・ハイリヒ・シタドケ博士夫妻

東西経済アカデミー (OWWA) 会長 元国連科学技術局長 (ドイツ)

ジョン・ル・デルス夫妻

金融コンサルタント (元世界銀行役員) (フランス)

オリビエ・ジスカルデスタン

INSEAD (ヨーロッパ経営大学院) 副理事長 (フランス)

■アメリカ

スチファン・ブラスウェル

ブルーデシヤル保険 投資サービスグループ副議長

ジョン・チャールトン

チェイスマンハットン銀行常務

アーサー・コリンズ

メドトロニック社最高業務執行責任者

ハマー・ハマリー

3M社副社長

ウォルター・ホードリー夫妻

フーパー研究所シニアリサーチフェロー

元バンクオブアメリカ副社長兼チーフエコノミスト

ロバート・マクレガー

ミネタ企業責任センター所長

ジェイムズ・モンゴメリ

パンナム・ワールドサービス元会長

ジョン・ブレイス

グローバル・リソーシス社長

ノーマン・ボウイー

ミネタ大学エルマアンダーセン企業責任研究委員長

■日本

遠藤源太郎夫妻

グンゼ相談役

小笠原敏晶夫妻

ニフコ社長、ジャパントイムズ会長

賀来龍三郎

キヤノン会長

金子保久夫妻

松下電器産業渉外本部副本部長・理事

住友義輝夫妻

住友電気工業顧問 国際MRA日本協会会長

高瀬保夫妻

東海大学教授 (元GATT事務局)

遠藤実夫妻

在ジュネーブ国際機関日本政府代表部大使

と人権尊重を背景とし、両者の良いところを認め合って作られた共通の原則であるところに意義がある。

また、人間の尊厳の理念は、日本国憲法のなかでも種々用いられており、それを日本文化の中に十分定着させなければならぬ。特に次の規定に注目されたい。

第13条（個人の尊重と公共の福祉）
すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。

第24条2（家庭生活における個人の尊厳）
配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

この指針を、将来は日・米・欧以外の文化と哲学も包容した真に世界的な指針に発展させることが望ましい。次のような動

きがある。とにも注目したい。一九九三年に、英国のエディンバラ公やヨルダンのフセイン国王などの努力で、「キリスト教徒、回教徒及びユダヤ教徒の間の国際ビジネスに関する倫理規範」が作成された。これは歴史を共有する三つの宗教徒間で、理念の相違から生ずる現実のビジネス問題の解決を図ったものである。しかし、女性の地位などについては、大きなギャップがあ

って、融和を果たしえなかった。「共生」の理念は、序文の中で次のように説明されている。「人類全体の利益と幸福の実現に向けて共に生き共に働くという意味であり、互いの協力、共存共栄と健全で公正な競走との両立を図ろうとするものである」。ここでいう共生理念は包括範囲が

広く、公正な競争（第三章（5）参照）との共存が図られていることに着目して頂きたい。「異文化からきた「人間の尊厳」の理念を具体的に理解し実行することは、日本企業にとって必ずしも容易ではない。しかし、職場環境と生活内容の改善ならびに個性と能動的思考を尊重す

る風潮を育てていく。ために、その実行が望まれる。」序文はこれを次のように説明している。

「人間の尊厳は、一人ひとりの侵されることのない神聖さと真価を究極の目標としており、他人の目的や、過半数の意見を達成させるための単なる手段となつてはならない」。

「共生」および「人間の尊厳」という二つの理念は、第二章の一般原則と、第三章の利害関係者に関する原則において詳しく具体的に示されている。第二章は企業の責任などに関して七つの一般原則を掲げ、第三章は顧客、従業員及び投資家のみならず、協力会社（下請け）、競争相手の地域社会を取扱う場合の指針を示している。

また、家庭の主婦が以上の理念を実行する大きな役割を担っているとの意見が、多数の会議出席者から出されたことは興味深い。先進国において出生率の低下を防ぎ、社会の衰退を防ぐこと、幼児の人間としての尊厳を尊重すること、家庭重視によって人格形成を助けること、犯

罪者や麻薬患者の増加を防ぐこと、失業問題を緩和することなど、いろいろな良い影響を家庭の主婦が与えることが再認識された。また、途上国の人口急増や婦人の身分が問題とされることが多い反面、先進国の人口急減が将来世界にもたらす問題が軽視されている。

主婦が家庭において果たす役割の重要性が社会と夫から十分認識され、よい家庭を築き上げる協力を得られれば、現代社会が直面している多くの社会問題の悪化を回避できる。しかし、この問題は批判を恐れてタブー視されることが多く、十分な議論が行われてこなかった。両性平等の基本原則にのっとり地球が直面する現実問題の解決が図られなければならないであろう。

「第一章 前文」について

前文は、次にくる第二章と第三章の背景と理由を説明している。最も注目されるのは、たとえ市場原理に沿った合法的行動をとっていても、企業の芳しくない行動がおこることが認識されていることである。近來、経

済と社会の健康維持に、市場における自由競争と法律が果たす役割の限界が感じられてきている。このような状況のなかで、企業が自主的に果たす役割が大きくなっている。行動指針は、世界における良き企業市民がその責任を果たす具体的方法を示すものである。

「第二章 一般原則」について

第二章の一般原則は、ビジネスが社会改造の強力な担い手であることなどを理由とし、七つの行動原則を示した。企業の責任、経済的・社会的影響および行動、ならびにルール尊重、多角的貿易体制の支持、環境への配慮および違法行為の防止に関するものである。第二章は、日本側が主として起草し、欧米側が手を入れて完成された。

「第三章 利害関係者

(Stakeholders) のための原則」について

第三章は、米国ミネソタ州にあるミネソタ企業責任センターが、3M社などの地元の有力企業ならびに中小企業と協議して

まとめた「ミネソタ原則」を土台として作成された。

企業が関係する六種類の利害関係者、1) 顧客、2) 従業員、3) オーナー/投資家、4) 仕入先、5) 競争相手及び6) 地域社会(Communities)の取扱についての原則を詳しく規定している。

企業の行動指針の普及について

この問題については次のような意見がCRTメンバーから出された。

一。この行動指針は、企業が形式的に承認しても実効が伴わなければなんにもならない。企業の方から積極的に採用して実行するように、理解と普及に努めるべきだ。ただし、本原則を採用する企業は、差し支えなければ、日本の場合、コー円卓会議日本委員会(国際MRA日本協会内)にその旨を表明して頂きたい。

二。まず、日・米・欧の各地域がその地域に適合した方法で普及活動を行なおう。

三。その後各地域から行動指針の実施への反響、企業の利益や

安定への影響などについての情報を収集して交換し、相互の普及活動に役立てよう。

四。行動指針を既に成功している企業に適用することは問題が比較的少ないであろう。しかし、不景気の時、事業が好調でないとき、競争が激化しているとき、異常に大きな利益を得る誘惑が目前にあるとき、汚職や談合が広く行なわれている場合、同業者の大多数が非倫理的行動をとっている生き残るためにやむを得ないと感じられるときなどに、この指針がいかなる役割を果たしうるかに関心がもたれた。

五。上記と関連して、キャノンの賀来龍三郎会長は次のように述べられた。「企業にはその状況からみて次の四種類がある。段階的に進化していく場合もあるし、一気に第3または第4段階に到達できることもある。」

1) 資本主義そのものを適用している企業はダイナミックであるが、労使対立など問題も多い。

2) 労使協調があつて企業が運命共同体をなしているが、地域社会などへの視点欠ける。

3) 企業が利害関係者や地域社会への責任を分担することができるが、国際摩擦のような問題の処理が困難である。

4) 企業がグローバルな問題の解決に協力することができる。

この段階では、企業が貿易・経済問題、貧富の格差、環境問題、次世代への責任などの世界的問題を取り上げることができるよう。

六。普及活動は、企業内、企業団体、大学、などでのセミナーや教育、ならびに講演、著書、広報雑誌、学会などでの発表や引用などいろいろな方法が考えられる。

七。将来は日・米・欧以外の地域への普及が望ましいが、地域や国によって普及の可能性が異なるう。

高瀬 保(たかせ・たもつ)

一九三二年生まれ。東京外国語大学卒。大蔵省関税局採用、ガットなど担当8年間勤務。六三年ガット事務局に出向、二十九年間勤務。(途中大蔵省退職)九二年ガット事務局を部長で定年退職。東海大学法学部教授就任。国際経済法及び国際組織法担当。現在に至る。著書「ガットとウルグアイラウンド」(東洋経済新報社)

コーポラ卓会議・企業の行動指針

序文

コーポラ卓会議は、世界の企業経営関係者が経済、社会状況の改善のために重要な役割を果たさなければならないと確信する。私たちの抱負を綴ったこの文書は、企業行動の是非を判断する世界的な基準を示そうとするものである。私たちは互いに共有する価値観を確認し、異なる価値観の調整を図り、それによってすべての人々から受け入れられ尊敬される企業行動のあり方を明らかにする作業を始めたいと思う。

これらの原則は、「共生」と「人間の尊厳」という二つの基本となる倫理的理念に根ざしている。日本から示された「共生」という概念は、人類全体の利益と幸福の実現に向けて共に生き共に働くという意味であり、互いの協力、共存共栄と健全で公正な競争との両立を図ろうとするものである。「人間の尊厳」は、一人ひとりの侵されることのない神聖さと真価を究極の目標としており、他人の目的や、過半数の意見を達成させるための単なる手段となってはならない。第2章の一般原則は「共生」と「人間の尊厳」の精神を明らかにし、第3章のステークホルダーズ（企業をとりまく利害関係者）の原則は、それらの理念の具体的な適用のあり方を示している。

その表現や形式において、この文書はミネソタ企業責任センターがまとめた「ミネソタ原則 (Minnesota Principles)」に負うところか大きい。同センターは、日本、米国並びに欧州の代表から成るこの文書の起草委員会を主催し議長役をつとめた。

企業行動は、国家間の関係や人類の繁栄、福利に影響を及ぼす。企業はしばしば国家間の最初の橋渡しの役割を担い、そのあり方が社会的、経済的変革をもたらすことから、世界中の人々が感じる恐れや信頼にも重大な影響を及ぼす。コーポラ卓会議のメンバーはまず自らを正すことを第一とし、「誰が正しいかではなく何が正しいか」を明らかにしようとしている。

第1章 前文

雇用や資本、商品、技術の活発な移動により、企業による取引活動やそれが及ぼす影響はますますグローバル化している。

企業行動の規範として法と市場の力がもちろん必要ではあるが、それだけでは十分とはいえない。

企業が自らの方針や行動に対して責任を負うことと、ステークホルダーズ（企業をとりまく利害関係者）の尊敬と利害を尊重することが基本となる。

繁栄を分かち合う責務などの価値観を共有することは、小規模な地域コミュニティのみならずグローバルなコミュニティにおいても重要である。

以上の理由と、社会を前向きに変革していく上で企業が力強い担い手となり得るとの確信から、私たちは企業責任を模索するビジネスリーダーによる対話と行動の拠りどころとして以下の諸原則を提案する。こうした提言を行うことによって、企業の意思決定において道徳的価値が必要不可欠であることを私たちは主張したい。道徳的価値を持たずして、安定したビジネス関係や持続可能な世界コミュニティを実現することは望み得ない。

第2章 一般原則

原則1 企業の責任——株主のみならずステークホルダーズ（企業をとりまく利害関係者）全体に対して

企業の社会的存在価値は、企業が新たに生み出す富と雇用、消費者に対して質に見合った適正な価格で提供する市場性のある商品とサービスにある。そうした価値を創造するためには、企業は自らの経済的健全性と成長力を維持することが不可欠であり、単に生き残りをかけるだけでは十分とはいえない。

企業はまた自らが創造した富を分かち合うことによって、あらゆる顧客、従業員並びに株主の生活の向上をはかる役割を有している。仕入先や競争相手も、企業が自らの義務を誠実かつ公正の精神で全うすることを期待することが望まれる。さらに事業活動が行われる地方、国、地域並びに地球コミュニティの「責任ある市民」として、企業はそれらコミュニティの将来を決定する一翼を担っている。

原則2 企業の経済的、社会的影響——革新(イノベーション)、正義並びに地球コミュニティを目指して

諸外国に拠点を置いて開発や生産、販売に携わる企業は、生産的雇用の創出と国民の購買力の向上を支援することによって、それらの国々の社会的発展に貢献しなければならない。企業はまた事業活動を行う国々の人権、教育、福祉、活性化に貢献すべきである。

企業は、効率的で適正な資源の利用、自由で公正な競争、さらには技術や生産方式、マーケティング、コミュニケーションの革新に積極的に取り組むことによって、事業活動を行う国のみならず地球コミュニティ全体の経済、社会の発展に貢献しなければならない。

原則3 企業の行動——法律の文言以上に信頼の精神を

企業秘密保持の正当性を受け入れる一方、裏表がなく、率直で、真実を語り、約束を遵守し、透明であることが、企業自らの信用と安定のみならず、商取引、特に国際的な取引の円滑化と効率化に役立つことを認識しなければならない。

原則4 ルールの尊重

貿易摩擦の回避と、より自由な貿易、平等な競争条件、あらゆる関係者の公正かつ衡平な処遇を促進するために、企業は国際的ルール並びに国内のルールの両方を尊重しなければならない。さらに企業行動の如何によっては、たとえそれが合法的ではあっても芳しくない結果をもたらすことがあることを認識すべきである。

原則5 多角的貿易の支持

企業は、GATT/世界貿易機関(WTO)その他国際協定に基づく多角的貿易体制を支えていかななければならない。企業はまた自国の政策目標を尊重しつつも、漸進的で適正な貿易自由化の推進と、世界貿易を不当に妨げる国内規制の緩和の促進に協力を惜しんではならない。

原則6 環境への配慮

企業は環境を保護し、可能な場合には環境を改善し、持続可能な経済発展を推進し、天然資源の浪費を防止しなければならない。

原則7 違法行為等の防止

企業は贈収賄やマネーロンダリング(不正資金浄化)その他の汚職行為に関与したり、それらを看過することがあってはならない。さらに付言するならば、企業はそうした行為を排除するために関係者と積極的に協力すべきである。テロ行為や麻薬取引、その他組織的犯罪に利用さ

れる武器等の取引を行ってはならない。

第3章 ステークホルダーズ（企業をとりまく利害関係者）に関する原則

(1) 顧客

私たちは、すべての顧客に敬意を持って接することを信条とする。顧客が私たちの商品やサービスを直接購入しようと、あるいは間接に市場で求めようと、この信条に変わりはない。そのために、私たちは以下の責任を有する。

- ・顧客の要請に合致する高品質の商品並びにサービスを提供する。
- ・私たちの商取引のあらゆる場面において顧客を公正に遇する。それには、高水準のサービス並びに顧客の不满に対する補償措置を含むものとする。
- ・私たちの商品及びサービスを通じて、顧客の健康と安全並びに環境の質が維持され向上されるようあらゆる努力を傾注する。
- ・商品並びにマーケティング、広告を通じて人間の尊厳を侵さないことを約束する。
- ・顧客の文化や生活様式の保全を尊重する。

(2) 従業員

私たちは従業員一人ひとりの尊厳と、従業員の利害を真剣に考慮することの重要性を確信する。そのために、私たちは以下の責任を有する。

- ・仕事と報酬を提供し、働く人々の生活条件の改善に資する。
- ・一人ひとりの従業員の健康と品格を保つことのできる職場環境を提供する。
- ・従業員とのコミュニケーションにおいては誠実を旨とし、法的及び競争上の制約を受けないかぎり情報を公開してそれを共有するよう努める。
- ・従業員の提案やアイデア、要請、不満に耳を傾け、可能な限りそれらを採用する。
- ・対立が生じた際には誠実に交渉を行う。
- ・性別、年齢、人種、宗教などに関する差別的な行為を防止し、待遇と機会の均等を保証する。
- ・能力差のある人々を、それらの人々が真に役立つことのできる職場で雇用するよう努める。
- ・従業員を職場において防ぎうる傷害や病気から守る。
- ・適切で他所でも使用できる技術や知識を、従業員が修得するよう奨励し支援する。
- ・企業の決定によってしばしば生じる深刻な失業問題に注意を払い、政府並びに被雇用者団体、その他関連機関並びに他の企業と協力して混乱を避けるよう対処する。

(3) オーナー、投資家

投資家が私たちに寄せる信頼に応えることの重要性を理解する。そのために、私たちは以下の責任を有する。

- ・オーナーの投資に対して公正で競争力のある利益還元を図るため、経営の責任を担う者として企業経営に精励する。
- ・法的及び競争上の制約を受けないかぎり、オーナーや投資家に対して関連情報を公開する。
- ・オーナーまたは投資家の資産の保持、保護、拡大を図る。
- ・オーナーまたは投資家の要請、提案、苦情並びに正式な決議を尊重する。

(4) 仕入先

仕入先や協力会社（下請け）との関係は相互信頼に基づくべきである。そのために、私たちは

以下の責任を有する。

- ・価格の設定、ライセンス(知的所有権の実施許諾)、販売権を含むすべての企業活動において公正と正直とを旨とする。
- ・企業活動が圧力や不必要な裁判などによって妨げられることのないように努める。
- ・仕入先と長期にわたる安定的な関係を築き、見返りとして相応の価値と品質、競争力及び信頼性の維持を求める。
- ・仕入先との情報の共有に務め、計画段階から参画できるように努める。
- ・仕入先に対する支払いは、所定の期日にあらかじめ同意した取引条件で行う。
- ・人間の尊厳を重んじる雇用政策を実践している仕入先や協力会社(下請け)を開拓、奨励並びに選択する。

(5) 競争相手

私たちは、公正な経済競争こそが国家の富を増大し、ひいては商品とサービスの公正な分配を可能にする基本的な要件の一つであると確信する。そのために、私たちは以下の責任を有する。

- ・貿易と投資に対する市場の開放を促進する。
- ・社会的にも環境保全の面においても有益な競争を促進するとともに、競争者同士の相互信頼の範を示す。
- ・競争を有利にするための疑わしい金銭の支払いや便宜を求めたり、関わったりしない。
- ・有形財産に関する権利及び知的所有権を尊重する。
- ・産業スパイのような不正あるいは非倫理的手段で取引情報を入手することを拒否する。

(6) 地域社会

事業活動が行われる地域社会で改革や人権擁護のために活動する団体に対して、私たちはグローバルな企業市民として何らかの貢献ができると確信する。そのために、私たちは以下の責任を有する。

- ・人権並びに民主的活動を行う団体を尊重し、可能な支援を行う。
- ・政府が社会全体に対して当然負っている義務を認識し、企業と社会各層との調和のある関係を通して人間形成を推進しようとする公的な政策や活動を支援する。
- ・健康、教育、職場の安全、並びに経済的福利の水準の向上に努力する地域社会の諸団体と協力する。
- ・持続可能な開発を促進、奨励し、自然環境の保護と地球資源の保持に主導的役割を果たす。
- ・地域社会の平和、安全、多様性及び社会的融和を支援する。
- ・地域の文化や生活様式の保全を尊重する。
- ・慈善寄付、教育及び文化に対する貢献、並びに従業員による地域活動や市民活動への参加を通して「良き企業市民」となる。

「企業の行動指針」(日本語版) 完成しました
一部500円(学生300円 共に送料込)でおわけします。
十部以上ご注文の場合は一部300円となります。お申込みはMRA事務局(03-3821-3737)へお願いします。



世界九ヶ国から十六名の若者達が集まった

今年の一月から十二週間にわたりオーストラリアで行われた第二十回国際青年育成スタディーコースに参加しました。今回のコースには、オーストラリア、ニュージーランド、フィジー、カンボジア、ベトナム、マレーシア、イギリス、台湾、そして日本の九ヶ国から十六名の若者が集まり、三ヶ月間を共に過ご

しました。前半はメルボルン市のMRAアジア・太平洋センター「アイマ」で寝食を共にしながら六週間講義を受けました。講師陣として、元教育大臣で、今でも人々の尊敬を集めるキム・ビーズリー氏を初め、前労働組合全国委員長やポートピアブルとしてオーストラリアに到着し、その後

スタディーコースで僕が学んだ大切なこと

加藤 保之



努力を重ねて弁護士になったベトナム人青年、カンボジア人社会の指導者、社会学者等、様々なキャリアを持つ人々が来られました。また、参加者一人ひとりが自国の社会、文化、宗教、習慣などを紹介し合うプログラムもあり、各国の歌や踊りや料理なども楽しみながら理解を深めました。

この間、炊事や掃除、芝刈りなどの当番もあり、チームの一人員として働くことを覚えたり(面白いもので、料理りやスポーツの時になると、皆協調性を欠いてしまう傾向がありました)、スポーツや音楽、そしてドラマ(寸劇)のクラスでは自分でもこれまで気付かなかった、または忘れていた仕事や勉強以外での興味や可能性を発見しました。

アジアとの架け橋に

後半の六週間は、フィールドワーク(野外実習)で各地を訪ねました。先ず二週間で首都キヤンベラで過ごしました。キヤンベラは街中に緑溢れる美しい

都市で、僕はすっかり気に入ってしまいました。新しい国会議事堂は八回以上も訪問し、外交委員長や大蔵大臣を初めとする政治家と会見したり、上院の議事を傍聴するという貴重な体験も得ました。

また現地のビルマ人やカンボジア人社会の指導者たちや世界的に著名な地質学者のグリーン博士とも親しく話をする機会がありました。日曜日にはホームステイ先の御主人の勧めで戦争記念館を見学しました。このことは、アーマ滞在中に台湾人参加者と日本と台湾の歴史について涙ながらに語り合ったことと併せて、僕の将来を左右する経験となりました。歴史はいつまでも人々の心の底に生き続けていくのだということに気付かされました。そしてこれからの時代を担っていく世代の一員として、しっかりと自分の責任を果していかねければならないと強く感じました。

僕のこれからの人生をアジアの国々との架け橋作りの為に少しでも役立てたいと心に決めました。

アポリジニーの町なども訪れる

キャンベラの後は、二つのグループに分かれてシドニーとアデレードに向かいました。僕はアデレード組に参加し、アポリジニー（豪先住民民族）の町などを訪ねましたが、多民族多文化主義政策がかなり機能しているかのように見えるオーストラリア社会の暗黒面をまざまざと見せつけられる思いでした。

ホームステイ先はカンボジアの支援活動を精力的にされてい



●クッキングチームの仲間達と

るMRA専従のマイク・ブラウン氏宅で、カンボジアで三月に行われたMRAセミナーから帰国したばかりの氏より現地情勢を伺ったり、奥さんに僕の将来のことなどについて相談に乗ってもらったりしました。

このように各地でMRA専従の皆さんや、彼らを支援する沢山の「普通の人々」に出会い交流できたこともとても大きな経験となりました。

正直、率直さというものの大切さ

アデレードに三週間滞在した後、再びアーマに戻り、シドニー組と再会を喜び合いました。そしてすぐ、四泊のキャンプに出かけ、食事や睡眠の時間さえ惜しむように、お互いのフィードワークの体験や、コース後の計画などを語り合いました。彼らとは兄弟姉妹のように親しくなり、遠く離れた今でもその気持ちは変わりません。ここまですぐに理解し合い親しくなれたことは、これまで学校や職場の仲間たちと長い間一緒に過ごして、そうはありませんで

した。彼らとの交流を通して、正直、素直さということがどれほど大切なことかということが身に沁みて分かりました。彼らと共に過ごした三ヶ月間は、僕のこれまでの人生最良の時でした。この九ヶ月間、時にはしんどい思いもしましたが、いつも沢山の方々に支えて頂きました。本当に有難うございました。最後に、オーストラリアからイギリスへと、MRA理事でこの一月に亡くなられた川口昌宏氏の講演録「MRAの幸福への技術」を常に携えていたことを申し添えさせていただきます。(終)

事務局通信

●つい先日、IMAJニュースNo.75をお届けしたばかりですが、No.76をお届け致します。色々とお伝えすべき出来事が多くなり、今号は32ページにもなっていました。10月のMRA日本キャンペーンについてもお伝えしたかったのですが、スペースと時間の関係で次号で特集します。来年も年4回の発行を予定していますので、ご意見やご要望がございましたら是非お寄せ下さるようお願い致します。

●この機関誌の発送はもとより、事務局の様々な仕事のかかなりの部分がボランティアの皆様方のご奉仕によって賄われています。ワープロやコンピューター、簡単な翻訳やテープ起こし、または封筒の宛名ラベル貼りやMRAの資料や書籍の整理、ETC.とにかく何でも結構ですから週一回、あるいは十日に一回位なら手伝える、そんな方がいらっしゃれば是非事務局までご一報下さるようお願い申し上げます。

●本年の皆様方の様々なご支援にお礼を申し上げますと共に、95年が皆様にとって良い年となりますことを事務局一同願っております。来年もどうぞ宜しくお願い致します。



●得意の空手の腕前を披露する